

人生ハンド仏句

第62号
H. 19. 5. 1
(毎月1日発行)

教科書問題

(誤りをこのまま放置してよいのか)

住職 谷川寛俊

他の教科書問題についてはいろいろと論議されているが、過日、ある高校生の日本史の教科書を見る機会があった。その中に、今、日蓮大聖人に対して攻撃的・独善的・温情が薄い・偏見といったイメージが一般化しているようなのでビックリしました。何故こんなことになってきたのか、その大きな理由の一つに高校の歴史或いは日本史の教科書に問題があるように思われます。そしてもう一つは(これは私の個人的な考えだが)、真宗王国と言われている北陸地方、ことに我が富山県は浄土宗、浄土真宗(東西)系が約七割をしめています。かつて娘を嫁がせるには日蓮宗(法ヶ宗)以外の宗旨へ、という具合に日蓮宗に対して大変毛嫌いしている家が多かったようです。その理由は「日蓮という坊さん

は、他宗や政治を激しく攻撃したり批判をした為に罰が当たって島に流されたり、色んな迫害に合ったのだ。」と言ったような事が言われました。(戦後急激に進出して来た創価学会の影響も勿論あるが)いわゆるこの様な表現が教科書に多く見られるのです。これが文部省による国の公式見解だとすれば、かなり問題です。大聖人のご遺文に深く触れれば「攻撃」どころか事實は全く逆である事が伺われます。ご遺文は膨大ですが、多くに触れる事は大変困難ですが、歴史家のご遺文の一部だけのしかも表面のみを見て記述していると思われたいからです。

大聖人の場合一見攻撃とも受け取られる事柄も実は仏使(お釈迦様の使い人)としての使命感からくる慈悲の忠告であり、報恩の諫言(かんげん)だったのです。

つまり大聖人の宗教者としての出発は報恩と慈悲からであり、これがご生涯の一貫した考え方だったので。「仏教」とは文字通り「仏の教え」

編集・発行
玉蓮山 真成 寺
編集部 谷川久仁子
TEL・FAX (0765)22-2268
メールアドレス
kokorochanthk@ybb.ne.jp
ホームページアドレス
<http://www.geocities.jp/sinjyoujitovama108/>

です。だからたとえ専門家の言葉といえども人の語に従ったら仏教ではありません。「法に依って人に依らざれ」(依法不依人)とは涅槃経に出て来るお釈迦様の遺言でもあります。大聖人はどこまでも仏語に忠実に生きられたのであり、決して独善的ではありませんでした。真の仏教(法華経)に依らなければ大聖人の目的とするところの真の救済は有り得ないからです。

以上のように大聖人が出家して学問を志した目的は報恩と慈悲にあったのです。

参考の為、各教科書に出ている文章の一部を紹介すると、

「他宗をきびしく攻撃し、純粹に法華経を信仰しなければ国難をまねくと予言して幕府に迫った為、迫害された。

例えば、念仏は無間地獄の業、禅宗は天魔の教え、真宗は亡国の教え、律宗は国賊の教えとして退けた。」

(有名な四箇格言)

日本史B 実教出版

「国難の到来を予言したり、他の諸宗派や幕府政治を激しく攻撃したので、しばしば弾圧された。」
新日本史B 桐原書店

日本史B 三省堂

私見として今後の教科書記載分の要望例を挙げると、「日蓮は今の仏教界の現状は仏の意に則していない。それに結びついた政治も誤っており、その結果民衆を苦しめているとして幕府を諫めたために迫害を受けた。」と記載してもらいたいものである

